このままでよいのでしょうか？

教団教職の皆様に訴えます

２００８年１０月２５日
西九州伝道所
佐々木正明

先に小生は、「危機」という文をしたため、教団教職の皆様にお送りいたしました。お忙しい中、お読みくださった方々、また、賛同してくださった方々に感謝を申し上げます。

あれから数ヶ月たちましたが、教団の指導部の中で、この問題をどのように取り扱おうとしておられるのか良くわからず、不安な気持ちでいっぱいです。

あと２０年たてば、私たちの教団の４分の１から３分の１が自然消滅するであろうという予測は、私の中でますます強い確信になっています。何人もの教職の方々が同じ危惧を抱いています。また、その後、幾つかの他教団の教職たちと話し合う機会を持ちましたが、ほとんどが同じ危機感を募らせていました。ただ、あまりにも恐ろしく、声を出せないでいるか、もうあきらめて、自分だけが献身を全うして死ねばあとはどうなっても、神様が最善にしてくださると考えて、黙しておられるようです。私たちの教団は、まだ良いほうだというのが実感です。しかし、それで問題が解決したわけではありません。

日本の社会構造が変わったのです。都市と田舎の関係が、４０年、あるいは３０年前の日本と、随分違うのです。今までのようなことをしていては、社会の動きに取り残されてしまいます。数十年前に開拓した地方の過疎地域の教会で、幸いいま自立している教会も、今後立ち行かなくなります。そのあとから開拓した過疎化地域の教会は、わずかな例外を除いては、いまも大変な厳しさの中にあり、２０年後も生き続けることはかなり困難です。都会の大きな教会も、その影響を受けて弱体化します。その上、教団の教職は高齢化しています。１９５０年以前に生まれた教職者の何割が、あと２０年後も元気に働いていることができるでしょうか。献身者は少なくなっています。今後退職する教職者の数に追いつけません。

私たちの教団の教会の多くが消滅するとわかっているのです。どうして、教団指導部は迅速な対策を打ち出さないのでしょうか。その現実にしっかりと目を向け、警鐘をならし、話し合おうとしないのでしょうか。たとえ、１０分の１が消滅するとしても、大変なことなのです。有力な都市の教会の発言力の強い教職たちが、危機感を抱いていないからでしょうか。弱い教会の教職たちは、がたがた騒がず黙って自分の献身を全うすればそれで良いと考えておられるのでしょうか。自分たちの教会さえ良ければそれでよいのでしょうか。

教団は教職者を派遣しました。地方にある小さな教会の教職も、忠実に教団の任命に従ったのです。あまり不平を言わず、黙々と働いてきたのです。キリストの体としての教団は、どのような行動をとるべきでしょう。

このまま行くと、ある教職が話してくださったように、地方の教会の牧師は、静かに年老いて働け

なくなり、教会もだんだん弱くなり、結局、宗教法人で税金のかからない教会堂を終の棲家として死んで行くことになります。小生も、そのように死ぬ覚悟はできています。自分が選んだ献身です。しかしそれが最善の方法でしょうか。

最近、聞くところによると、来年は第３回宣教会議を開くそうです。そこで、どのようなことが話し合われるのでしょう。宣教の方策論でしょうか。それも大切です。私も学んできましたし、学び続けています。しかし、いまもっとも緊急な課題は、迫りくるこの危機にどのように対応するかということを話し合うことです。まったく対応できずに危機を迎えるのでしょうか。何かの対応をして危機を最小限にとどめるべきでしょうか。

この宣教会議自体、総会の承認なしに理事会の主導で話が進められています。理事会にそのくらいの勇気があるならば、この宣教会議を単なる宣教方策論を話し合う会議ではなく、迫りくる危機にしっかりと向き合い、真剣に話し合い、対策を練る場にしていただきたいと、強く願うものです。たとえ、完全な解決策は見いだせなくても、何かができるはずです。

小生はこの願いを単に小生の願いとして理事会に申し上げるのではなく、多くの教職者の皆様に訴えたいと思います。思いを共有していただきたいからです。そして、声を上げていただきたいからです。私たちは献身してきました。何年も、地方の弱小教会のために心血を注いできました。その努力をただ消滅させたくはありません。何らかの対策を講じて、未来に繋げて行きたいと思います。いかがでしょうか？